



Title	「思いやり格差」社会からの脱却：利他主義の可能性と支え合いのかたち
Author(s)	稲葉，圭信
Citation	セミナー年報，2009：135-143
Issue Date	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2787
Rights	
Type	Article
Textversion	publisher

「思いやり格差」社会からの脱却 —利他主義の可能性と支え合いのかたち—

稲場 圭 信

神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

「思いやり格差」社会

格差社会とは所得格差が顕在化した社会を意味するが、筆者は、「思いやり格差社会」について論じている。「思いやり格差社会」とは、端的に言って、人々の思いやりの度合いに格差が生じている社会である。

現代社会は、新自由主義や自己責任の方向に大きく舵が取られ、自分さえよければよいという利己主義の風潮が強い社会だ。事実、「社会意識に関する世論調査、2009」（内閣府）でも、現在の世相を「自分本位である」とみる日本人の割合が45.8%に対して、「思いやりがある」とみる人は11.2%である。

自分の利益や保身だけに腐心している人がいる一方で、行き過ぎた利己主義や利益至上主義の社会のあり方に違和感を持ち、福祉ボランティアに熱心な人もいる。このように、日本は他者への思いやりを持つ人と持たない人に分断された「思いやり格差社会」に向かいつつある。

他者を顧みない思いやりの欠落した大人たちの生き方は子どもにも影響を与える。日本人の小学生の思いやり度は、1970年代から80年代にかけて急激に低下し、90年以降も低迷したままという調査結果がある。経済格差はたしかに問題だが、次の世代への橋渡しとしての大人の責任を考えると、「思いやり格差」の方が「経済格差」よりも深刻な問題だ。今こそ、人間らしい「思いやり」を取り戻し、「支え合う社会」を構築しなければならない。

そのような問題意識から、2008年、筆者は『思いやり格差が日本をダメにする～支え合う社会をつくる8つのアプローチ』を執筆した。本稿では、筆者のこれまでの宗教利他主義研究、宗教の社会貢献活動研究を概括し、「思いやり格差」社会からの脱却、利他主義の可能性を考えることにする。

評価社会：孤独におかれる現代人

なぜ、「思いやり格差」が生まれているのか。その背景に評価社会が考えられる。私たちは、この世に生まれてから常に周りからの評価というプレッシャーのもとで育つ。その評価のプレ

ッシャーは、よい学校、よい大学、一流企業、ノルマ達成と終りがない。無論、一生懸命に努力して、正当に評価され、努力が報われるのはよいことである。しかし、評価が常につきまとう環境では、人はうかつに自分の失敗や悩みを他人に打ち明けられない。それによって自分の評価が下がる危険性があるからだ。そのような環境で人間関係が希薄化する。ひとりで悩みを抱え、自殺してしまう人も少なくない。年間3万人以上が自ら命を絶っている。そのような人たちを横目に、日本社会は、効率・利益重視でひた走り、そして他者をかえりみない世の中になってしまった。一方、災害救援ボランティアや社会福祉のNPOを通じた「思いやり」のある生き方に自分の生きる道を見いだす人もいる。「思いやり格差」は広がる一方である。

ソーシャル・キャピタル

社会の様々な組織や集団の基盤にある「信頼」「規範」「人と人の互酬性」が強く、しっかりしているところは、組織や集団として強い。思いやりによる支え合い行為が活発化し、社会の様々な問題も改善される。組織や集団にあるこの「信頼」「規範」「人と人の互酬性」が「ソーシャル・キャピタル」である。

1995年、阪神淡路大震災が起り、多くの日本人が、メディアを通して、全国から駆けつけたボランティアの姿を目にした。その年の世界価値観調査で、日本では、人に対する信頼度が上がった。他者の苦境を思いやり、他者のために活動をしている人がいる、この事実が、人に対する信頼度を押し上げたのだ。ボランティアが盛んなところでは人に対する信頼が高い。実際に、世界の30数カ国のデータにおいて、ボランティア活動などの支え合いの活動と人への信頼に強い相関関係が見られた。そして、世界の各国がソーシャル・キャピタルに関心を示し、様々な社会政策を進めてきた。

なぜ、ソーシャル・キャピタルが重要視されているのか。日本社会は、世界の多くの国と同様に、民主主義化を進め、豊かさを追求してきた。しかし、現代社会には、犯罪、貧困、環境問題、テロリズムなどの多くの問題がある。都市化・核家族化も進行し、枠組みとしての共同体は崩壊の危機に瀕している。市場至上主義により経済格差が拡大した。そして、今、過剰な利己主義への批判と「支え合う社会」構築への希求からソーシャル・キャピタルが注目されているのである。

ソーシャル・キャピタルとしての宗教

宗教もソーシャル・キャピタルの源泉とみなされている。他人を信頼しにくいリスク社会で、人間関係が希薄化し、人々はソーシャル・キャピタルの乏しい関係性を生きている。しかし、信頼にもとづく人間関係なしでは人は生きにくい。人々は信頼にもとづく人間関係を求めているが、ソーシャル・キャピタルの乏しい世の中では、なかなかそのような人間関係は得られない。一方、宗教集団は、信じるということを基盤に人と人とのつながりを作りだし、コミュニ

ティの基盤となる可能性を持つ。これが、近年、欧米で宗教がソーシャル・キャピタルとして注目されている理由だ。

イギリスでは、排除された人や孤立した人を取り込むような包含的社会（inclusive society）をつくりだそうとして、政府がソーシャル・キャピタルの考え方を積極的に導入し、市民の自発性にもとづくパートナーシップがより進められた。そして、信仰を基盤にしたチャリティ団体が貧困の撲滅や社会福祉の現場で幅広く活躍している。

独立宣言や建国の立役者たちが残した言動に起源を持つ「市民宗教」の国であるアメリカでは、国民の約半数が毎週教会に通う。そして、宗教団体を母体とした社会福祉サービスは、年間 7,000 万人以上のアメリカ人を支援している。アメリカでは、宗教がコミュニティでの支え合いや社会福祉とつながっている。

利他主義

利他主義とは、英語では、アルトルイズム（altruism）と言う。19 世紀のフランスの社会学者、オギュースト・コントによる造語である。心理学では「愛他主義」という言葉を用いるが、同じ意味である。動物行動学や遺伝子研究などの分野でも「利他主義」の語が使用されている。コントが、エゴイズム（egoism 利己主義）に対置させてアルトルイズムという語を定義したことからも、日本語では、「利己」に対して「利他」、利他主義の方が愛他主義よりも概念としては適切であろう。利他主義という語は学問的に使われて久しいが、日常的には使わない。その意味するところは、自己の利益のためではなく他者のために心遣いをする態度である。端的に言えば、他者への「思いやり」である。

便宜上、ここでは利他主義を利他的行為として、「社会通念に照らして、困っている状況にあると判断される他者を援助する行為で、自分の利益をおもな目的としない」と定義しておく。それほど深刻ではない状況であっても、相手のことを思いやり、手を差し伸べる行為も利他的行為とする。上記の定義では、「自分の利益をおもな目的としない」と補足的な説明をつけているが、これには理由がある。それは、多くの人考える疑問と関係している。他者を援助する行為であっても、実は他者のためではなく、自己満足のため、自尊心のため、自分だけが幸せであるという罪悪感から逃れるため、あるいは、周りから賞賛を得たいためなど表面には出てこない功利的な動機が潜んでいるのではないか、という疑問である。しかし、これでは内的な要因を含まない純粋な利他主義が存在するのか否かという終わりなき議論になってしまう。そこで、内的な要因は定義から除外し、現実生活に存在する行いに対して定義を与え、研究の対象として取り上げているのである。

人間性と利他主義

利他主義という言葉は、一般的にはあまりなじみのない言葉である。しかし、利他主義に関

係する人間の心と行いについては、人類の歴史において古くから論じられてきた。そこには大きく分けて三つの見解が存在する。人間性悪説、人間性善説、そのどちらでもないとする三つの見方である。

人間性悪説はマキャベリやホブズなどの社会思想の出発点となっている。人間は生まれながらにして自己中心的で、ルールがなければ自己の利益のために悪さをもするという考え方である。反対に孟子に代表される人間性善説は、人間は本来的には善なるものであるという考え方だ。そして、第三の考え方は、環境によって人間は善人にもなれば、悪人にもなるというものである。20世紀末からの研究は、利他主義は社会生活によって学ぶことができるという第三の考え方をベースにした結果を数多く提示している。

利他主義における実証主義的研究、特に心理学的アプローチでは、「なぜ、人は他のために自らの命を投げ出したり、手を差し伸べたりするのか、いかなる状況下で人はより利他的になるのか」というような研究が主であった。そして困難な状況にある人への共感や感情移入が利他的行為の動機であるという仮説に関する論文が多数存在する。また他人や敵対者に対してよりも親戚や友人に対してより共感を覚えるということが様々な研究によって確認されている。一方で、社会的規範への志向性が利他的行為の源泉となることも指摘されている。しかし、このような仮説が、近い関係にある人に対しては共感が、そうでない場合には社会的規範への志向性が利他的行為の動機であるというような単純な二分化をしているわけではない。ナチスによるユダヤ人虐殺に際し、危険を冒して救済活動をした人たちが共感にもとづいていたり、親戚への腎臓提供者を道徳的義務によって行ったりするケースも存在するからである。

ボランティア活動と宗教の接点

世界史をひも解けば、多くのボランティア組織の源流がキリスト教にみられる。その根底にはキリスト教の隣人愛の思想があり、それは聖書に説かれる「善いサマリア人」の逸話に端的にあらわれている。仏教においては慈悲の心や菩薩行・利他行が説かれる。古くは、身寄りのない貧窮の病人や孤老を収容する救護施設として聖徳太子や光明皇后が設けた悲田院や施薬院が慈悲の奉仕活動として知られている。こうした思想や活動が宗教団体のボランティア活動の淵源である。近現代では、救世軍のキリスト教社会事業、神道の社会福祉活動、仏教や新宗教のNGO活動やボランティア活動など諸宗教が様々な活動を展開している。海外では、特にホスピスにおいて宗教者がボランティアとして活躍している。

キリスト教の諸派では、家庭訪問で聖書を配ったり、キリスト教の教えを説いたり、あるいは教会運営の活動など、すべて大切なボランティア活動と考えられている。また、布教伝道活動をボランティア活動と見なす立場もある。一方、日本の宗教団体の多くがボランティア活動をする際に、布教活動につながらないように慎重に活動をしている。宗教的信念にしたがってボランティア活動をするが、布教活動をするのではなく、苦しんでいる人の支援を目的として

いるのである。

世界の宗教団体の動き

現代社会の世界人口 65 億人のうち、キリスト教徒 21 億人、ムスリム 13 億人をはじめ諸宗教あわせて 8 割以上の人が何らかの信仰をもつ。そして、宗教団体が社会的に大きな役割を担い、様々な社会貢献活動、ボランティア活動を展開している。

宗教協力を基盤とし、平和実現に向かって活動する宗教者の集まり「世界宗教者平和会議 (WCRP)」の第 8 回世界大会が、2006 年 8 月、京都で行われた。約 100 カ国から、仏教、キリスト教、イスラームなど諸宗教の指導者ら 2000 名以上が集い、紛争解決、平和構築、持続可能な開発について宗教者の役割と具体的な実践を討議し、Shared Security (ともに命を守る) という安全保障の取り組み姿勢を示した。国際機関や世界的に活躍するボランティア組織、NGO の代表者も多数参加し、宗教組織とのパートナーシップを構築している。

宗教団体は、上記のような平和活動のみならず、様々な問題を抱える現代社会の状況にตอบสนองして、多種多様なボランティア活動を展開している。欧米社会では、Faith-Based Charity、Faith-Based Initiative と呼ばれる信仰を基盤とした社会活動、ボランティア活動の動きが盛んである。地域社会のボランティア活動やコミュニティ・サービスの一翼を担うのがキリスト教の活動という地域も少なくない。また、近年、社会活動やボランティア活動に積極的な仏教を「社会参加仏教」と呼ぶが、慈善活動、開発事業など多様な活動を展開している。

アメリカでは、前述したように宗教団体を母体としたボランティア活動が、年間 7000 万人以上の国民を支援し、その活動予算は年間 2 兆円を超える。イギリスでは、チャリティ団体として法人格をもった多数の宗教者による組織がボランティア活動をしている。刑務所受刑者の慰問ボランティアでは、500 人以上の宗教者が 130 以上の刑務所を毎日訪問している。

救援ボランティア活動と宗教 NGO

1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災の直後から、カトリック教会、金光教、浄土宗、浄土真宗、真如苑、神社神道、創価学会、天理教、日本福音ルーテル教会、立正佼成会などの宗教団体が救援ボランティア活動を展開した。その内容は、緊急支援物資の運送・配布、炊き出し、避難所のトイレ掃除など多岐にわたった。一方、多くの被災者が心のケアを必要としたが、宗教団体による心のケアは布教活動につながるとの警戒感もあり、宗教団体が前面に出て行くことはあまりなかった。宗教性や教団色を薄めてのボランティア活動に賛否両論があったが、宗教団体の組織力をいかしての迅速な救援ボランティア活動は、大きな社会的力となることを証明した。1997 年のナホトカ号重油流出事故や 2004 年の新潟中越地震でも、真如苑「SeRV サープ Shinryo-en Relief Volunteers」や天理教「災害救援ひのきしん隊」などが救援ボランティア活動を展開した。

世界に目を向けると、死者約 22 万人を出した 2004 年のスマトラ島沖地震と大津波には、多くの人が心をいため、募金活動や支援活動の輪が世界に広がった。その中には、宗教団体のボランティア活動もあった。2006 年に発生したジャワ島中部地震では、シャンティ国際ボランティア会が、緊急救援物資の配布、被災児童のための物資配布、青少年の心のケア活動など迅速に動いた。

宗教団体のボランティア活動が高度に組織化され、世界的に活動している NGO（非政府組織）がある。そのような宗教団体が母体となっている NGO を宗教 NGO と呼ぶことがある。宗教 NGO には、宗教の自由や振興を目的としている団体もあるが、多くの宗教 NGO が一教団としての活動を越えて、宗教的な理念にもとづいて平和実現や難民支援などのために活動している。イギリスの救世軍やクリスチャン・エイドは有名である。

日本の宗教 NGO の活動は 20 世紀半ばにもあったが、組織力をもって継続的な活動が展開され始めたのは 1980 年頃である。その時期は、ベトナムおよびカンボジア難民救援の NGO が多数誕生した時期であるが、曹洞宗国際ボランティア会（現シャンティ国際ボランティア会）が、カンボジア、タイ、ラオスで教育・文化支援活動を開始した。また、近年では、宗教 NGO のネットワーク形成が進み、超宗派の仏教者によるアユース仏教国際協力ネットワーク（1993 年）、人道援助宗教 NGO ネットワーク（1996 年）、仏教 NGO ネットワーク（2003 年）が発足している。

宗教団体のボランティア活動の機能と将来

宗教団体のボランティア活動には、大規模な NGO 活動が存在する一方で、他の団体の手が届かない、あるいは嫌がるトイレ清掃などの地道で日常的なボランティア活動も存在する。天台宗の「一隅を照らす運動」は、思いやりをもって社会の一隅を照らす人々を育成し、明るい社会を建設するために活動を継続している。真如苑の早朝清掃は、1970 年、数名のボランティア青年による駅前清掃にはじまり、現在、全国 5600 ヶ所の駅周辺やトイレなどで実施されている。大阪の釜ヶ崎では、ホームレスの支援のために、キリスト教者、金光教平和活動センター、世界宗教者平和会議日本委員会青年部会などが継続した活動を行っている。これらは教会、神社、寺院、教団での日常的な清掃などの奉仕活動や利他的実践の延長線上にある。

ボランティアであるということは、喧伝されるような自己実現や生活の充実という面だけでなく、人から偽善と言われたり、重い責任を背負い込み心労が重なったりなど、潜在的に傷つきやすい面を持っている。ゆえに、個々のボランティアに対する精神的なサポートが大切である。その面で宗教団体のボランティア活動は特徴的である。宗教団体のボランティア活動においては、宗教が与える世界観と信仰というバックボーンが活動における個々のボランティアの精神的支えになっている。信仰を共有するボランティア同士のつながりも重要な精神的支えとなる。

信仰を基盤とした実践としてのボランティア活動は、ときにはそれが信仰生活の一部であり、修行の一環と捉えられる。多くの宗教において説教や信者の体験談を通して利他的実践の大切さや活動の宗教的意味合いが説かれるが、その宗教が与える世界観がボランティアの潜在的な傷つきやすさを取り除く原動力となるのである。

宗教の社会貢献

2006年、「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト」(<http://keishin.way-nifty.com/scar/>)を立ち上げ、筆者は、「宗教の社会貢献」を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社会の様々な領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」と定義して研究をしている。

社会貢献の根底にある他者への思いやりを育む上で宗教の役割は重要だ。宗教団体と宗教者による社会的弱者の支援活動は、社会貢献活動の実質的な担い手としての機能に加えて、思いやりの精神を育てる公共的な場を提供する機能をも併せ持っている。なぜなら、様々な宗教が、思いやりの心、利他性に関する教えを持っているからだ。畏敬の念、神仏のご加護で生かされているという感謝の念が、人を謙虚にし、自分の命と同様に他者の命も尊重させる。そして、日本の伝統的な精神性にある「おかげ様」や「恩返し」といった感謝の心が思いやり行動の動機ともなるのだ。そのような宗教的な信念にもとづいて社会貢献活動をしている人たちが他の人たちにより影響を与える可能性をもっているのである。

しかし、日本では、宗教団体が行っている社会貢献活動が多数存在するにもかかわらず、そうした活動への社会的認知度や期待があまり高くない。実際に、庭野平和財団による調査（『宗教団体の社会貢献活動に関する調査』2008年）では、「宗教団体の学校教育活動、病院運営などの社会貢献活動を知っている」人は35%にとどまる。

宗教団体の社会的な活動に対する認知度が低いということは、宗教がソーシャル・キャピタルとして機能するコンテクストが弱いことを示している。つまり、宗教者が地域社会と強い信頼関係を持ち、住民との深い関わりによって人びとをつなぐような土壌があまりないということである。しかし、日本には外国経由での再評価という特質がある。日本の宗教団体がNGO活動を通して海外で活躍し、評価されれば、日本社会も外国の評価をうけて日本の宗教団体の社会貢献を認識し、評価するということもあるだろう。

終わりに

虐げられている人、苦境にある人を横目に自分だけが生き残る、あるいは自分だけが孤独に苦境に立たされる。そのような孤独で生きにくい世の中に誰も住みたくはない。「支え合う社会」を作るには、ひとりひとりの意識の変革と行動が必要である。今、社会から排除された人、孤立した人を取り込み、その人の自立を支援する地域社会の取り組みがある。自分が直接そのよ

うな活動に関わらなくとも、他者の苦境を他人事とせず、心の片隅で他者のことを思いやる、それが希望ある社会の一步となる。

一人の力は小さくとも、一人の一步が水面に落ちた小石の波紋のように社会に広がる。思いやり、あたたかい眼差しによって、ゆるやかなつながりのある「支え合う社会」を次の世代に手渡せるのだ。

思いやりの心や利他性を育てる上で宗教は重要だが、その宗教は、社会の中で生きる宗教でなければならない。思いやりを説き、お説教したり、道徳教育で教えたりというのは、一定の効果はあるが、それほど大きな力になってはいかない。人は人とのつながりの中で社会化されていく。実際の行動の実践者、ロールモデル、お手本との接触が思いやりの発達には絶対的に必要である。宗教者がそのようなロールモデルになることが大切だ。

思いやりの心と行動は、崇高な理念に支えられた特別な人だけに備わった特殊なものではなく、誰にでも身につくものである。そのために、子どもたちの思いやりの心が育つ環境を大人たちが作っていく必要がある。強制されるのではなく、自然と湧きあがってくる思いやりの心と行動こそが、青少年犯罪、貧困、孤独死など様々な問題を抱える現代社会を「支え合う社会」へと導く原動力となるのだ。

イギリスで社会活動をするある宗教者から、筆者は次のような言葉を聞いた。

「活動の中で個性のぶつかり合いがある。しかし、それは不寛容だということではない。共同作業をすることによって価値観の衝突が起きてくるが、それも一つの学びとして自分自身が変わっていく。」

「思いやり」とは反対に思える「価値観の衝突」をチャンスととらえることだ。価値観の衝突を経験し、対話を通して葛藤状態を乗り越える。世の中には、様々な考え方がある、自分とは異質なものは当然と思える経験が、思いやりの心を育てるのである。

註：本稿は、公開セミナーの内容に加筆修正したもので、筆者が執筆した以下の文献に基づいている。

「思いやり・宗教利他主義・社会貢献関連」の主な参考文献

単著

- Keishin Inaba, *Altruism in New Religious Movements: The Jesus Army and the Friends of the Western Buddhist Order in Britain*, 2004年12月 大学教育出版
- 稲場圭信『思いやり格差が日本をダメにする～支え合う社会をつくる8つのアプローチ』2008年10月、NHK出版、生活人新書270。

共編著

- Ruben Habito & Keishin Inaba eds, *The Practice of Altruism: Caring and Religion in Global Perspective*,

「思いやり格差」社会からの脱却

2006年6月 Cambridge Scholars Press 全209頁.

- 稲場圭信・櫻井義秀『社会貢献する宗教』2009年12月、世界思想社
共著

- Keishin Inaba, 'Altruism and Religion in Europe: Theoretical Perspectives of Motivation', in D. Jerolimov et al. eds, *Religion and Patterns of Social Transformation*, 2004, Institute for Social Research pp.207-220
- 稲場圭信「シェアされるスピリチュアリティと意識変容」伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也編著『スピリチュアリティの社会学』2004年11月 世界思想社 122-142頁, 187-189頁
- 稲場圭信「ボランティア、利他主義、絆の気づき」、榎尾直樹編『アジアのスピリチュアリティ—精神的基層を求めて』、2006年2月 勉誠出版 166-177頁
- 稲場圭信「宗教の社会参加と利他主義」、『宗教と福祉：IAHR2005 東京大会パネル記録』、2006年7月 皇學館大学出版部 1-19頁
- 稲場圭信「宗教団体のボランティア活動の現状と将来」、渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本 2007』2007年3月、平凡社、172-175頁
- 稲場圭信「宗教的利他主義とボランティア」櫻井義秀、三木英編著『よくわかる宗教社会学』2007年11月、ミネルヴァ書房、166-167頁
- Keishin Inaba & Kate Loewenthal, 'Religion and Altruism', in Peter B. Clarke ed., *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion* (Oxford Handbooks), 2009, Oxford University Press pp.876-889

論文等

- 稲場圭信「現代宗教の利他主義と利他行ネットワーク：立正佼成会を事例として」『宗教と社会』第4号 1998年7月 153-179頁
- Keishin Inaba, 'Altruism and charitable activities of new religions in Japan: Theoretical perspectives', *Asian Cultural Studies*. Vol. 27. March 2001 pp.2-18
- Keishin Inaba, 'Voluntary Work, Altruism and Religion in Europe' *Informationes Theologiae Europae*, Peter Lang, Nov.2002 pp.35-46
- 稲場圭信「新宗教信仰者の利他主義がもつ構造とその発達要因—イギリスの新宗教を事例に—」『宗教研究』334号 2002年12月 91-114頁
- Keishin Inaba, 'Meaning and Construction of Altruism in New Religious Movements' 『人間科学研究』第11巻-1号 2003年 1-15頁
- 稲場圭信「日本の宗教とNGO」『国際宗教研究所ニューズレター』第41号 2004年1月 4-8頁
- 稲場圭信「高齢者に対するボランティアの「利他的行動」と「ケア精神」に関する社会人類学的研究」『研究結果報告集 Vol.8』三井住友海上福祉財団 2004年 60-63頁
- 稲場圭信「宗教団体の社会奉仕活動と社会制度—英米仏を中心とした—考察から展望する日本の宗教 NGO の将来」『神道文化』第16号 2004年11月 72-84頁
- 稲場圭信「アメリカにおける宗教の社会貢献—「慈善的選択」と信仰にもとづいた社会福祉サービス」『国際宗教研究所ニューズレター』第58号 2008年4月 11-16頁